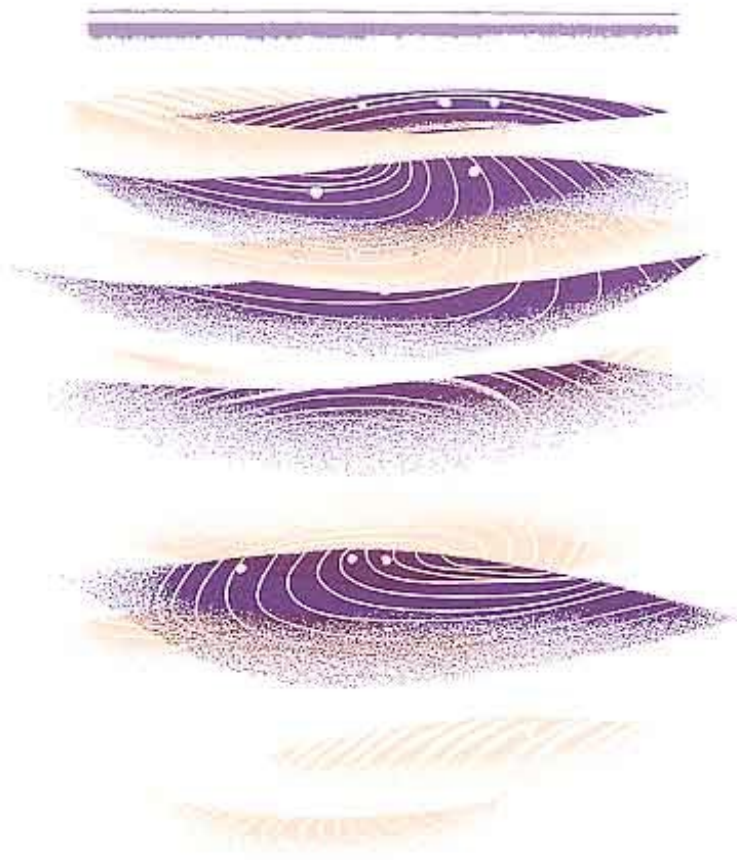


昭和66年2月1日第3種郵便物認可
平成16年3月1日発行(毎月1回)1頁発行
発行雑誌 沖 誌 第3巻第3号

俳句雑誌「おき」



3月号



沖
発
行
所

初夢路

林 翔

誰が住むや柚子を遠見の丘の家

この小さき蕊にもいのち花八つ手

鳩鳥は昇る朝日の卵とも

冬蠅のたふとき命碎くなよ

卒 寿

一月二十四日に私は満九十歳の誕生日を迎えた。当日は近親者のみで小宴を催したが、その前後に各句会その他知人から贈られた祝花に、家じゅうが香っていた。

ところで、卒寿という言葉は、私はあまり好きでない。「卒」の草書体が「九十」と見えるところから出来た言葉なのだが、この草書体を楷書にした「卒」の字は、文部省制定の「常用漢字」にも入っていない俗字なのである。

また正字の「卒」にしても、卒業だけはめでたいとしても、卒倒とか卒中とか、いやな連想がある。卒のもともとの意味は下僕のことだから軍人でも、兵卒といえば下級軍人のことである。

二年前に私は「米寿」であった。これはいい言葉。八十八の三字を一つに寄せ集めると「米」という字に見えなくもない。日本はもともと稲

笑み加へ給ふ福神煤払

若き日のわれが迷へり初夢路

遅しき真紅の芽あり冬畢らむ

佐保姫の乗る雲ならむやはやはと

紅梅の蕾たしかや遠見にも

G線にゆらぐアリアよ陽炎よ

作の国、米の国である。

九十九歳を白寿というのはクイズめいている。百引く一は九十九だから、百という字から「一」の字画を取ると、白になるわけである。

これらの言葉が何時出来たのかは知らないが、とにかく日本人が造った言葉であろう。満六十歳(数え年では六十一歳)を選暦と言ひ、例えば甲子の歳に生れた人が再び甲子の歳を迎える時は、十と十二(十千十二支)の公倍数で六十になっているわけだが、念の為に『大宇源』を引いてみると、「還暦」も日本で出来た言葉なのであつた。

林 翔



沈思

能村 研三

小さな町の図書館

厳寒の沈思のころ密にせり

凍滝に一縷の音をたくはへし

いつのまに庭のオブリジェの大火鉢

雪の夜のビル透명한昇降機

先日、本阿弥書店の二十周年を記念した新年会が開かれた。その冒頭で挨拶された歌人の篠弘氏が「沖」の話がされた。歌人が俳句雑誌のことを話すとは思ってもみなかったのが驚いた。話は「沖」十一月号に書かれた林翔先生の「五百字随想「老いの句」の中から、「老いの嘆きを詠むのでなくもつと前向きに」という文を紹介され、高齢化時代の詩歌の詠み方について話された。

その話の内容もすばらしかったが、忙しい歌人協会長の篠氏が、俳句の結社誌を詳しく読まれていることに驚いた。早速、お目にかかり、ご挨拶の中で「沖」を取り上げていたことにお礼を申しあげたら、「貴方の文章もよく読んでいますよ」と言われ、一月に書いた文章のことを話題にされた。面識のない私のことをまで気にかけていただいていることを知り、冷や汗が出る思いであった。

その翌日仕事を兼ねて山形県の川西町にある「遅筆堂文庫」を訪ねた。市川に長く住んでいた井上ひさしさんが、故郷の川西町にご自分の蔵書

初場所や極り手の名も瑞とせる

埋め戻す土余りたる冬早

雪折竹淘汰と言へば栓も無き

男には肩の稜線雪来るか

ことさらに闇の死角へ豆を撒く

日脚伸び礎の蹴上げの高きかな

十三万冊を寄贈したものを収蔵閲覧する図書館で、今でも毎月井上さんから本が送られて来るといふ。中には、井上さんが付箋や傍線を引かれた本もあり作家がいかに本を大事にしているかがわかった。そこには、俳句の本もあって、登四郎の『菊塵』など三冊の本も並べてあり、さらに私の第二句集『海神』と出会うことが出来たのが嬉しかった。当時、井上ひさしさんにお読みいただくために送ったもので、大切に収蔵されていることに感激した。小さな町の図書館まで読まれているのは、大変ありがたいうれしいことである。

私も句集や雑誌をいろいろ送って頂くが、忙しさにかまけてよく読まないこともあり、今回の篠弘さんと井上ひさしさんの本に対する愛情というか、本を大切にされる気持ちに感動し、反省させられた。

能村研三



蒼茫集



深雪村

吉田

明

柚子風呂の湯気たつぶりも嬉しけれ
冬至南瓜むかしは子供多かりき
地吹雪の目つぶしを食ひ老二人
深雪村つらぬき玉と響く水
深き息つく寒の水飲み干して
寒晴のまつ只中ゆ嬰のこゑ

束の間の

藤原照子

年酒酌みあひ束の間の大家族
寒星にまぎれむ離陸ベルト締む
耐ふるとも笑むとも一花冬すみれ
鮫鯨を捌きし手もて鍋奉行
むささびや夜目にも戸隠山尖る
老拒み逝きしか夫や寒昂

はなびら餅

中尾杏子

子

G線 上

北川英子

冬薔薇にこもれば我も薔薇の息
老いて知るはなびら餅のうす甘さ
振り出しに戻せぬこの世絵双六
潮騒は母の鞠唄野水仙
寒ざくら透けり後生は見えねども
鱧鱒のスープとろりと寒の明

真つ暗な湖の底より雪起し
侘助や遠忌といふも耕二頭つ
目つむりてG線上の虎落笛
煤竹や千手の腋をくすぐりて
糸足して初凧はもう神の域
手鏡ほど余呉置き見はるかす深雪

潮鳴集



冬ざくら

大庭 三千枝

亡き後の日月迅し冬ざくら
極月の蔓草こんなにも伸びて
踏み込めぬ人のこころの白障子
竹の寺に竹の吐月峰冬ぬくし
暁闇に星を数へて去年今年

命とは

坂本 京子

点滴の冴ゆる一滴命とは
寒鼻身の節ぶしをはげましつ
皆既月蝕ひとの世の枯れすみ
さう言へば人間模様蔦枯れて
枯野原深く入りたる身の渴き

鳶

楠原 幹子

マスクして一重験のなほ細し
旋回の鳶や一月動き出す

裸木となりて大樹のこころざし
菊焚いて夜は遺句集を開きけり
寒の水胃の腋に棒のごとささる

ひと夜

千田

敬

七草籠ひと夜わが家の山河なり
このわたの箸に齟齬あるたのしさよ
伊勢海老に髭とふ虚実ありにけり
ひらがなの対峙弾けて歌留多取り
風狂にいまだ憧れ鳥雲に

風花

長谷川千枝子

初日待つ小さき手はやも拝むよ
芹・薺あとはうやむや粥かゆする
風花や空の綻び何処より
母の声まざと寒夜の爪切れば
北塞ぎすぎしかとみに物忘れ

沖作品



能村研三選

東京 齊藤 實

坂 ようこ

千葉 林 昭太郎

耳や鼻突き出るものの冬めける
風呂吹の円柱箸を惜しみけり
狐火やひよんな事から芝居観に
過去を思へば切山椒の長さほど
寒造り蔵に天保の樽置かる
群鳥を入れて一樹やクリスマス
年迎ふ松幼木の松の姿
暦売うしろの闇に吐く独語
元朝の文机われに硬かりし
日に覚むるステンドグラス冬木の芽
白をもて寒気貫く富士の峰
人間に壊すよろこび氷踏む
陽にかざす命の明かり寒卵
凧の奥更に凧あり空ありぬ
空よりも水の明るき雪催
マフラーを赤にしてよりやや強気

新潟

長谷川 春

静岡 竹原 惣一

長野 矢崎すみ子

愛媛 渡部 義雄

さいはては雪と聞く夜の初時雨
鶺鴒高音ホットミルクの一口め
冬帽子あの世の父も被るころ
大白鳥胸張り子らを従へり
生きてなほ働く幸の年惜しむ
師の齢に一步近づくと年迎ふ
注連飾りかけて牛舎に寝藁足す
掬ひたる掌に綿虫のこそばゆし
年あらたこの世に残る一句欲し
日を碎き荒ぶ山湖や干菜吊る
裏八ヶ岳の峰の薄雪酒香る
里山の灯のあをあとと虎落笛
横時雨山湖は人を拒みをり
遥かなる日の婚の荷に歌がるた
風音のままに暮れたり葉喰
帰り花臉の重き日なりけり

無心とは冬日を抱く雑木山
波郷忌の岸遠くをりかいつむり
茫茫とわが歳月や根深汁
毛糸編む肩やさしかりモジリアニ
口中にマシマ口弾む小六月
遠目して獵犬の息しづかなり
石筍の燭のゆらめき去年今年
襖絵の虎踏み歩く藪明り
ライバルに退かれし力士山眠る
鞆を握りかくして東京へ
突き放し教ふことも寒落暉
息細くおとす吉書の一画目
松飾あつさりと立つ駅の前
由布山鶴見山枯野の裾を分かちあふ
浮寝鳥売店も閉ぢ眠りたる
注連取りしリゾートパーク潮明り
薄紙のごとき月あぐ近松忌
恰好のこずゑに鷹の眼あり
筑波嶺に深き一礼鍬はじめ
船笛に「沖」の未来や年明くる
人の世へ耳立ててゐる冬木の芽
かいまみるやうに日の射す藪柑子
短日や耳遠き日と聡き日と
見し夢と打つて変りし今朝の雪
竈猫適ふ晩年とはならず

東京

福嶋千代子

茨城

今瀬 一博

大分

河野美千代

東京

石川 笙児

栃木

増渕ふさ子

愛知

三好 智子

ここ出雲大注連繩に死角なし
裏鬼門日の矢を誘ふ実千両
詩の虫にいのち吹き込む五日かな
新宿に手のひらほどの冬銀河
枯野ゆく自ら風となりてゆく
凍空は他人の空の如きもの
牡蠣食へば我が腹中の海となる
江の島と富士のあひだに蒲団干す
砲台のありしあととや水仙花
園児らの父渾身の餅を搗く

静奈川

菅原 健一

大森 春子

新人賞予選句（三月）

耳や鼻突き出るものの冬めける
群鳥を容れて一樹やクリスマス
人間に壊すよろこび水踏む
マフラーを赤にしてよりやや強気
生きてなほ働く幸の年惜しむ
日を碎き荒ぶ山湖や干菜吊る
風音のままに暮れたり葉喰
石筍の燭のゆらめき去年今年
突き放し教ふことも寒落暉
由布山鶴見山枯野の裾を分かちあふ

齊藤 實

坂 ようこ

林 昭太郎

長谷川 春

竹原 惣一

矢崎すみ子

渡部 義雄

福嶋千代子

今瀬 一博

河野美千代

沖作品 選後句評

*
能村研三

耳や鼻突き出るものの冬めける 齊藤 實

人間の体の中で耳や鼻は中々被うことが簡単に出来ないこともあって敏感に寒さを感じる個所でもある。耳はフードのついたコートや毛糸の帽子などを被ったり、耳あてや耳袋など防寒対策は結構たくさんある。しかし鼻ともなると、別の目的でかけるマスクのほかは、「鼻あて」などと言うものも余り聞いたことがない。いずれにせよ、耳と鼻は昔から人間にとって寒さを直接受けやすい構造に出来ている。私はいつも自転車通勤をしているので、本格的な冬を迎えるとまず寒さをまともに受けるのが、耳と鼻。そう思うとこの部分が体の中で一番動物的な部分なのかも知れない。

群鳥を容れて一樹やクリスマス 坂 ようこ

坂ようこさんは今月も好調で、前月に続き巻頭二席。最近は人間の住む都会の樹を群鳥の大集団が占領することがある。まるでヒチコックの映画に出てくるシーンだが、特に椋鳥が櫛の

木などを嘯として集まってくる。人里離れた所よりも人間が多く住む都会は自然の環境が良いはずがないのだが、却ってカラスや蛇などの天敵から守られると言う。私の家の近くの木にも、昼間はどこかに餌を求めていたのが、夕方になると小集団をなして次から次へと嘯とする木に集まってくるのだ。それは賑やかで、数は二、三千羽はいるだろうか。こうなると鳴き声も騒音となり、糞の害にも悩まされる。しかし今日はクリスマス木の電飾を施された木にいつものように群鳥が集まってきている。中七の「容れて」という表現が慈愛に満ちていてあたたかい。

人間に壊すよろこび 氷踏む 林 昭太郎

林昭太郎さんは、かつて二十年位前に「沖」に所属して優秀な成績をとった人。句会に久々に出席して投句も再会されたのがうれしい。この句には秘められた人間の本能とでもいうか、形あるものを壊したくなる人間の心理が描かれている。池に薄く張った氷などを見ていると不思議と靴の裏で踏んで壊したくなる。ものを壊すといっても、氷の場合は命ある花を筆るのとは違って、人間としての罪悪感はずいぶん、特に子供たちは必ずといってよいほどそれをして戯れる。しかし、たとえ命がなくても、自然の力で水が氷るいわば「完成」したものを破壊することに他ならない。だれも気がつかない人間のものを壊す心理を見事に捉えた。(以下略)